正宗白鳥全集

第二十九卷

隨筆　四

福武書店

正宗白鳥全集第二十九巻

一九八四年三月二十一日　印刷
一九八四年三月三十一日　發行

著者　正宗白鳥
發行者　福武哲彦
發行所　株式会社　福武書店
東京都千代田區九段南二-二-二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇-二三一
振替口座（東京）六-一〇五〇九七
印刷・製本　大日本印刷株式會社
定價　六〇〇〇圓
第九回配本（全三十巻）
（落丁・亂丁本はお取り換え致します）

©YUZÔ MASAMUNE 1984
《シリーズコード》ISBN 4-8288-2046-9
ISBN 4-8288-2113-9 C0095
NDC918 216 546p

正宗白鳥全集　第二十九卷

監修　井伏鱒二
　　中村光夫
　　山本健吉
編集　紅野敏郎
　　中島河太郎
装丁　山高登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二十九卷　隨筆四　目次

文壇五十年　二
新しくもならぬ人生　六六
編集者今昔　七八
『アルプスの眞晝』　八五
今日は無事　八六
今日は帝劇、明日は三越　八八
今年を回顧して　九三
昭和三十年　九八
回想　一〇〇
「新潮」と私　一〇二
私と中央公論　一〇六
逍遙先生と私　一一三
胃弱者のたべもの觀　一一六
變轉　一一九
空虛なる青春　一二二
冥途通信　一二五
懷疑と信仰　一二七
回顧錄　一八三
私の履歷書　二二二
テレビジョン　二二四
ぜいたくな生き甲斐　二二五
讀書の變遷　二二七
青春の夢を追ふ　二二九
人生おとぎばなし　二四五
爐邊雜感　二四七
私の戲曲　二五三

現代つれづれ草　二五五
特ダネを書かざるの辯　三三三
花より團子　三三四
すべて物憂し　三三七
我老いたり　三三一
閑人閑話　三三五
黄白相違辯　三三八
人生孤獨　三四二
私とゴルフ　三四六
讀書の樂しみ　三四八
冬の法隆寺詣で　三五三
小山内薫の遺したもの　三五五
讀書への愛著　三六一
樂隱居　三六三
輕井澤と私　三六七
生殘りの記　三七三
思ひ出　三八〇
祖先の家　三八二
陳腐なパリを好む　三八四
青年の木乃伊　三八六
私の遺言狀　三九八
舞臺で見た自分　四〇四
心の故郷　四一三
目がさめたやう　四一五
恐怖と利益　四一五
「東京」に住みて　四一七

一つの祕密　四一九
新春に思ふ　四二三
たべ物のさまざま　四二四
旅行の興味　四二七
思ふこと　四三三
御信心勸誘　四三三
そぞろ歩き　四三三
告別式場にて　四三三
古書讀むべし　四三四
カブキの運命　四三五
ある映畫　四三六
內村鑑三　四三七
から思ふことの自由　四三七
獨斷是非　四三八
モデル問題　四三九
女といふもの　四四〇
世界の短篇小說　四四一
俊子の碑　四四二
次のページ　四四三
小川未明追憶　四四三
素通り見物　四四四
文壇人の集まり　四四五
月の世界　四四六
交通事故　四四六
輕井澤の一日　四四七
文字の忘却　四四八

郵便箱の中　四四九
蚊の話　四五〇
悲壯なる空想　四五一
運命は理不盡？　四五一
暑さに親しむ　四五二
秋風記　四五三
ひとり旅　四七三
「わが終末記」　四七五
知人あれど友人なし　四七七
「歌會始め」陪聽記　四七九
白鳥百話　四八〇
弔辭（室生犀星）　五〇六
感想斷片　五〇八
滅びゆくもの　五一二
上野界隈　五一四
私と中央公論　五一七
遊行記　五一七
回顧談　五一九
解　題　紅野敏郎　五二一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

隨筆四

文壇五十年

一　小說界に君臨する尾崎紅葉

——逍遙の講義、內村の講演

五十年の昔といふと、私が讀賣新聞に奉職してゐた時分である。年少の身でありながら、藝術新聞といはれてゐたとの新聞の藝術關係の記事を擔當してゐた。美術と文學と演劇、それに音樂までも加へて、それ等の方面の消息を傳へ、批判をも下してゐた。それ等の批判は、今日から見ると、幼稚粗暴はなはだしきものであつたが、しかし私一個に取つては、都合のいい藝術修業になつたのだ。日露戰爭前後の日本の藝術の動搖推移の光景が、今回顧すると、記憶ちがひはあるであらうが、ありありと心に浮ぶのである。

明治三十六年、すなはち、日露戰爭發生の前年、私が二十五歳で入社した年の秋、團十郎が死し、紅葉山人が死んだ。その年の春には菊五郎が死んでゐた。それで、小說も歌舞伎も、舊いものが亡んで、新しいものが起らんとする空氣が漂つてゐた。私は日淸戰爭直後に上京して學校通ひをしたのであつたが、そのころ、紅葉は『多情多恨』を讀賣に書きはじめてゐた。當時の少青年に世界知識を注入して、激勵し煽動してゐた德富蘇峰は、心機一轉しかけて、魅力ある空論から脫出せんとしてゐたらしかつた。團十郎は、獨自の革命劇たるいはゆる活歷芝居の代表作『重盛諫言』や、江戶歌舞伎の標本である「助六」などを演じて、日本の演劇史上に最後の印象を留めたのであつた。

私は少年期に、故鄕において、江戶文學や明治の新文學に親しんでゐたが、新刊小說でも、田舍にゐて讀むのではあきたらず、それ等が發刊されてゐる東京で讀みたかつたのだ。そこに寫されてゐる都會のさまざまな風物、人間の行動、會話に直接に接觸しながら、それ等の小說を讀みたかつたのだ。小說でさへさうであつたのだから、芝居やキリスト敎の說敎などは、新聞雜誌で、その面影をうかがふだけでは物足りなかつたのはいふまでもない。

私は上京後、學生生活の數年間、田舍で憧憬してゐた都

會のさまざまなものに、飛びつくやうな思ひで接觸したのであつたが、今それ等を回顧的に整理して見ると印象の深いものは、學校では、坪内逍遙の沙翁講義、それに關連した文學や演劇に關する隨感隨想。學校外では、内村鑑三（文久一三―昭和五・三）の聖書關係の講義と西洋文學の講演。それと、團十郎、菊五郎の演技とであつた。逍遙の講義振りや感想は、是非如何にかかはらず、今なほ斷片的に記憶に殘つてゐる。内村のは、上京後最初の暑中休暇で歸省する途中、興津で開催されてゐたキリスト教夏季講習會に參會して連續カーライル講演を聽いて以來、機會ある毎に、彼の講演は、一つも殘すまじとして聽きに出掛けた。神田の青年會館で、月曜講演と名づけて何回か續けられた文學講演は、最も面白くて、熱心に聽いたものであつた。ダンテ、ゲーテ、カーライル、ホイットマン、ブライアン、ローエルなど。文獻としてどれほど正確であつたか、批判も當を得てゐたか否か不明であるが、とに角、學校で聽く學究的講義とはちがつて、生氣潑剌たるものがあつた。彼の口から出ると、聖書地理でも實に面白かつた。坪内逍遙（安政六・五―昭和一〇・二）は、自分が學生時代に最も樂みにしてゐたものは、新富座で團十郎の芝居を觀ることであつたといつてゐた。内村は、高等學校にて西洋歷史擔任の當時、古本屋で、カーライルの『クロンエル傳』を一圓で買つたのだが、それを讀んだために、權威に屈しない覺悟をきめたなどと、文學講演の間に祕密の心境をもらしたこともあつた。彼は歷史や詩歌は愛好してゐたが、小說は嘘を書くといつてきらひ、芝居のごときは極度に排斥してゐて、私もさういふものかと思つてはゐたが、さう思はされたため、かへつて、小說や芝居に魅惑されたのであつた。禁制の木の實を食ふやうな樂みだ。

私は、回顧して、逍遙の講義振り、若かりし時代の内村の講演調、團十郎の舊套打破の臺詞回しが、今聽くが如く思ひ出されて、彼等の假聲を私は使ひ得ると自信してゐる。

私はあのころ、紅葉の愛讀者であつた。『多情多恨』（明治二九・二讀賣新聞）や『隣の女』（明治二六・八讀賣新聞）などは幾度讀んだか知れない。今も讀みたいと思つてゐる。一度、知人に連れられて二葉亭を訪問したことがあつたが、彼も紅葉の愛讀者であつて、「自然主義の作品は面白いが、さうかといつて、以前の小說をみな排斥するのはどうかと思ふ。」と、紅葉を心に置いて、さういつてゐた。

明治二十年代には、紅葉（慶應三・一二―明治三六・一〇）は、新進批評家や知識人から非難されながら、小說界に君

臨してゐた。そして、二葉亭（元治一・二―明治四二・五）の『浮雲』（明治二二・七都の花）や、逍遙の「書生氣質」（明治一八・六―一九・一）などは、最初の人氣は間もなく衰へて、私が小說を讀みだしたころには、絕版になつて、容易に手に入らなかつた。明治が三十年代となり、博文館創立十周年記念として、「太陽」が臨時增刊を出した時、これ等の舊作品が收集されたので、私などは、その時はじめて讀むことを得たのである。

今の文壇では、その紅葉が光を失ひ、『浮雲』などが浮き上がつて、盛んな批判のまととなつてゐる。文學作品の浮沈推移も不思議である。

二　『金色夜叉』『不如歸』の時代

――樗牛・天外の活躍

日淸戰爭（明治二七・七）後から日露戰爭（明治三七・二）までの日本の文壇は、意氣揚がらない趣があつた。小說では『金色夜叉』（明治三〇・一讀賣新聞）と『不如歸』（明治三一・一一―三二・五國民新聞）の時代であつて、この二篇は、小說讀者の興味をそそり廣く流布したのであつたが、俊嚴な文學批判に堪へるやうな作品ではあるまい。いはゆる通俗臭が濃厚である。そして、當時の文壇は家庭小說などと呼ばれてゐた作品が跋扈してゐた。菊池幽芳（明治三・一〇―昭和二二）とか渡邊霞亭（元治一・一一―大正一五）とかの、大阪の新聞小說が讀書社會に歡迎されてゐたことによつても、當時の小說の風潮の低調さが推察されるのである。

評論では、高山樗牛（明治四・一―三五・一二）が群を拔いて目ざましく活躍してゐた。今から見て內容は大したものではなかつたが、デタラメの造語澤山の漢文調が、靑年讀者の心に詩のやうに響いてゐた。傍若無人の筆鋒であつたが、當時の文學に對する不滿の感じの現れてゐるところが、讀者に共鳴を覺えさせたのであつた。明治以來今日までの評論家で、彼ほどにぎやかに勢ひよく働いた者はなかつたのである。そして、內容は粗雜であり、ニーチエでも日蓮でも、どれほど深く理解してゐたか怪しいのであつたが、體裁は評論でありながら、そこには靑春の詩が現れてゐたのだ。

明治は時代の夜明けである。そこには、新しい時代の喜び、あるひは惱みを現した詩が出て來るべきはずであり、樗牛は樗牛なりの詩人であつたといつていい。そして、當時は、多少でも西洋語の讀める者は西洋の小說を讀みかじ

つて、日本の小說をけなすのが常例のやうになつてゐて樗牛はその代表者のやうな態度で、日本の新作品を侮蔑し、西洋諸國の有名作家の名と作品の名を持ち出してゐた。

それで、私が讀賣の文藝欄に初めてたづさはつた時分には、紅葉は一代の大作『金色夜叉』が行きづまつて苦悶して、その結果が死病に取りつかれたとうはさされてゐた。樗牛などから、この大作の不始末について、無慈悲な罵評を浴びせかけられたりしたのを私は讀んだ事もあつた。紅葉門下や、他の方面の新進作家も、進んで行く前途の目當てがつかないやうでそれぞれに持つてゐる才能も、思はしく發展しないやうな有樣であつた。樗牛は時代精神を寫せとか、文明批評を試みよとか、物知り顏にいつてゐたが、作家にとつては、そんな理窟は空論視されるだけであつた。

ところが、この時、新進の小杉天外（慶應元・九—昭和二七・九）が新たな文學態度で創作を試みようとした。ゾラの創作態度から感化を受けたらしく、「自然は善でもない、美でもない。」だから、醜でも惡でも、人間の行爲をそのままに描くといふ寫實主義を製作の標準とした。これは、樗牛の首唱した、空漠たる時代精神說や文明批評說とはちがつて、作家がそれを心に潛めて筆を採り得られるやうな、實際に卽した製作標準となるのであつた。天外のゾラ研究なんか、はなはだ淺いものであつたやうだが、とにかく彼はそれによつて目を開かれたのだ。それで、彼は「楊弓屋の何時間」とかいつたやうに、現實の見聞の寫生を試みたりした。ゾラが大袈裟に現實の世相調査をやつたのを、天外は手輕く、斷片的に、小規模でやつた。

天外は、『初姿』（明治三三・五　二六新報）『女夫星』など、書下ろしの單行本を出して、多少文壇の注意をひいてゐた。私が新聞社に入つた時には、天外は『魔風戀風』（明治三六・二讀賣新聞）と題した女學生をヒロインとした小說を、讀賣に連載してゐたが、これは『金色夜叉』以來人氣のわいた小說であつた。金色夜叉は、高等學校の學生を主人公とし、『魔風戀風』は、目白の女子大學の生徒らしい女學生を取り扱つたので、それが、若い男女の興味をひいて、作品の價値を一層高めた所以であつた。ところがこの小說は、決して寫實ではないのだ。在來の硯友社の作品以上に寫實に徹したものではなかつた。この小說が當つたため、新聞社の要求により、『コブシ』（明治三九・三讀賣新聞）とか『長者星』（明治四一・九—四二・八讀賣新聞）とか、續けて新作を連載したのであつたが、志するところはよくつて、筆は伴はなかつた。世は力づくだといふ意味を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com